2022 年度　教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部　学科	職位	氏　　名
教育学部 子ども発達学科	准教授	伊藤 数馬
最終学歴	学　位	専門分野
広島大学大学院教育学研究科博士課程前期修了	教育学修士	体育科教育学、サッカー

Ⅰ　教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

（理念）

学生目線に立ち、学生が主体的に学べ、且つわかりやすい教育活動の実践

（目標）

講義等や委員会活動を通して、学生に「真に信頼して事を任せうる人格」が形成できるよう教育活動を実践する。また自分のクレド「学生のために、自分ができることから最大限」を常に意識し、学生ファーストの姿勢で教育活動に取り組む。

学生が主体的な学びを実践できるよう、各教育分野で努める。特に教育方法の創意工夫、授業評価アンケートの結果を踏まえた事前事後学習が必要とされる授業内容の仕組みを検討導入する。学生の健康・安全を守るために感染症対策にもしっかり取り組む。教育保育現場で生きる指導実践力を養う授業内容を展開する。

（方針）

学習内容に対する興味・関心を高め、双方向性の教育を実施する

（計画）

幼児・児童が体を動かすことを好きになる運動指導の実践を研究し、そのための理論と実践を学生に学習、理解させる。学生の主体的な取り組みを引き出すため、グループ活動等を多く取り入れたアクティブ・ラーニングや ICT 教材を導入する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

保育内容（身体表現）、体育科教育法、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、幼児と健康

（後期）

専門スポーツ実習（球技）、体育、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、幼児と身体表現、保育内容（健康）、スポーツ実習、卒業研究

○教育方法の実践

授業内容の理解を深める工夫として、動画等視聴覚教材を活用し、ディスカッション及びグループワークを多く取り入れ、双方向型授業を実践した。また振り返りミニレポートでのやりとりを通じてフィードバックも行った。視聴覚教材の使用は、学生にとって学びやすく、授業内容の理解を深めることができるが、その後の振り返りミニレポートから考察すると、理解の浅い学生も見られたため、フィードバックの仕方等更なる工夫が必要である。ディスカッションやグループワークについても、積極的に活動できる学生とそうでない学生の 2 極化が見られたため、役割を分担する等この点についても引き続き改善していく。

○作成した教科書・教材

すべての科目において、対面・オンライン時に限らず、最新時事情報を盛り込んだ補助資料を作成し活用した。

・白井克尚、今津孝次郎、伊藤龍仁、堀篤実、伊藤数馬、梶浦恭子、新實広記、橘村晴美「『サービス・ラーニング』ハンドブック」第5版、愛知東邦大学教育学部、2019年3月

○自己評価

学生の目線に立ち、理解しやすいよう例示を多く活用した。グループワーク等を取り入れたことは、学生からも好評であった。学生に対するフィードバックについては、科目によって十分にできなかったものもあった。次年度は改善したい。

また授業規律等について、一方的な指導ではなく、学生とコミュニケーションをとりながら進めるよう心掛けた。実技科目を多く担当しているので、ただ実践して終わりとするのではなく、実践した先に、各学生の考えや工夫が生まれるような仕組みを今後も継続して考え、取り組んでいく。

Ⅱ　研究活動

○研究課題

・幼児・児童を対象とした「運動遊び」「体育科授業」に関する研究
・サッカーにおける指導実践（戦術的ピリオダイゼーションに着目して）
・バルシューレ（ボールゲーム指導プログラム）に関する研究

サッカーにおける試合時のフォーメーション（配置）やボールゲームおけるオフザボール(ボールを保持していない状況)の動きに着目し、その指導方法を検討し、教育活動に生かしていく。バルシューレ(ボールゲーム指導プログラム)や戦術的ピリオダイゼーションについても研究していきたいと検討している。

○目標・計画

（目標）

研究課題をまとめたものを研究成果物として学内外に発表できるよう努める。

（計画）

・幼児児童を対象とした「運動遊び」「体育授業」に関する調査報告や先行研究を収集、考察する。
・他研究課題についても、学会等で発表していく

○2015年4月から2023年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

・今津孝次郎、西崎有多子、白井克尚、中島弘道、新實広記、伊藤龍仁、柿原聖治、伊藤数馬「教員と保育士の養成における『サービス・ラーニング』の実践研究」唯学書房、2019年2月

（学術論文）

・伊藤数馬「領域『健康』の指導法に関する一考察　～保育実践教科書の分析を通して～」東邦学誌 第46巻 第2号 2017、2017年12月
・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要素を使った教授法Ⅱ―授業実践を通して―」東邦学誌 第45巻 第2号 2016、2016年12月
・房野真也、塩川満久、沖原謙、磨井祥夫、上田毅、大塚道太、菅輝、伊藤数馬、川口諒「ボール供給方向の違いがサッカーのインサイドキックに及ぼす影響」運動とスポーツの科学 第21巻 第1号 2015、2015年12月
・古市久子、矢内叔子、新實広記、伊藤数馬「保育士・教員養成課程の表現科目における共感的要

素を使った教授法Ⅰ―保育実践教科書を分析する―」東邦学誌 第 44 巻 第 2 号 2015、2015 年 12 月

（学会発表）

・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘、高橋幸平「球技の『工夫したゲーム』の実態調査　その１　サッカーで実施されている指導目的と工夫の仕方について」
日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会:会場 オンライン、筑波大学、2021 年 9 月

・大塚道太、小柳竜太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、山中亮、土田洋、梶山俊仁、山本英弘「ボール運動のミニ・ゲーム化が運動強度に与える影響について―競技人数の違いに着目して」
日本体育学会第 70 回大会:会場 慶応義塾大学、2019 年 9 月

・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬、梶山俊仁、山本英弘「ゴール型球技におけるコートの広さの違いが運動内容に与える影響―サッカーゲーム中のパス頻度に着目して」
日本体育学会 第 69 回大会 徳島大学、2018 年 8 月

・大塚道太、森木吾郎、房野真也、伊藤数馬「サッカーグラウンドの広さの違いが運動強度と内容に与える影響―正規グラウンドと面積 1/2 グラウンドの比較検討―」
日本運動・スポーツ科学学会 第 25 回大会 広島大学、2018 年 6 月

（特許）

特になし

（その他）

・2017 年度　授業実践優秀教員

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし

○所属学会

日本体育・スポーツ・健康学会、日本運動とスポーツ科学学会

○自己評価

今年度について、十分な研究成果を学内外に発表することができなかったが、次年度は研究成果を発表する機会を増やしていきたいと考える。

Ⅲ　大学運営

○目標・計画

（目標）

大学・学部における校務および委員会の活動を積極的かつ円滑に行う。

（計画）

【全学】・学生委員会　・FD・SD 委員会　・幼小教職課程・保育士養成部会
【ＷＧ】・新キャンパス整備プロジェクト WG　・大学再編準備室 WG2
【学部】・ガイダンス　・大学祭　・教職合宿　・介護等体験実習　・施設等実習

○学内委員等

幼小教職課程・保育士養成部会、学生委員会、FD・SD 委員会

○自己評価

FD・SD 委員会委員として、全学 FD 研修の内容を検討・実施し、授業評価アンケートの実施や今後の活用方法についても検討した。

また学生委員会委員として、課外活動に関する事項に対し、感染症対策の指導について尽力することができた。学生会については、毎月の定例会に出席し、大学祭や卒業記念行事等の企画・運営等、助言を行った。

学部での分掌については、介護等体験実習の運営、施設等実習副担当、入学生・在学生ガイダンスの企画運営を担当した。

Ⅳ　社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域に根ざした大学・学部であるよう社会貢献活動に積極的に参加する。

（計画）

教育学部の教育活動（サービス・ラーニング等）を通した地域貢献事業やボール遊び・サッカーを媒体とした地域貢献活動（少年サッカー大会・少年サッカースクール・近隣幼稚園への指導）を企画・実践する。

○学会活動等

愛知東邦大学地域創造研究所所員

○地域連携・社会貢献等

第 33 回愛知サマーセミナー　講師

TOHO SUMMER SCHOOL　「ボール遊び」講師

○自己評価

今年度について、学外向けの活動として、「幼児の運動遊び・ボール遊び」に関する講座を担当し、講演、指導実践を行った。

Ⅴ　その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

東海地域の大学サッカー発展に尽力することで自己研鑽したいと考えている。

Ⅵ　総括

今年度について、全てにおいて十分な取り組みができたとは言えないが、これまでの経験を生かし、教育研究活動を行うことができた。

研究面における今後の課題として、継続している共同研究に加え、幼児児童を対象としたボール遊びプログラム「バルシューレ」についての研究など、研究成果を学内外に発表する機会を増やし、幼児児童を対象とした「ボール遊び」教室等、実践する機会を増やしていきたい。

教育面に関しては、今後も学生の目線に立つことを忘れず、授業満足度を高め、学習内容の理解を深めることができる授業実践を心掛けていく。

以　上